

「ガラスの靴」における悦子への一考察

関氷氷 楊炳菁

浙江外国語学院 北京外国語大学

0. はじめに

「ガラスの靴」（「三田文学」1951年6月号初出）は安岡章太郎のデビュー作で、「各方面の讃辞と強い支持を受けた」（*1）秀作である。語り手を兼ねた「僕」と米軍接收家屋で働くメイドの悦子との「恋愛」が描かれたこの小説をめぐる言説を考察すれば、その研究軌跡は二つの時期に分けられると思われる。

初期「ガラスの靴」論は同時代評で、芸術面から小説を論ずるものが多いようである。勿論、これらの評価は「直前の主流——おおむね戦争や政治に真正面から取り組んできた戦後派の文学を基準としての発言で」（*2）、「思想性」、「政治性」などが欠如していると貶された、いわゆる「第三の新人」の文学であるからこそ、芸術面に焦点を当てたわけであろう。従って、「ガラスの靴」に描かれた「僕」と悦子との葛藤は、「独特の童話的雰囲気と清純さをもつ」（*3）恋愛だと見なされ、「学生である青年と二十歳の女性のあいだの、いくぶん童話めいてさえ見えるところの、ある心理的な時間のずれによる肉体関係の不成立という清純さと、きわめて奥深い緊張した釣合いをかし出す」（*4）私的世界の物語と読まれたのである。

1980年代以降、「第三の新人」への眼差しが変わり、「ガラスの靴」に関する言説にも新たな特徴が現れた。「ここに描かれているのは、男女の期限付きの幸福な愛の物語ではない。敗戦後においても戦争の痛みを引きずり、戦後の空虚さと喪失感を抱え込んだままに、「他者」と関わり出会うことができずにいた、自意識の損なわれた「僕」の物語なのである」（*5）というような解説が示しているように、敗戦という大きな背

景が研究者の視野に入っており、「僕」と悦子との葛藤も愛せない「僕」の物語だと読まれるようになった。一方、小野絵里華氏の研究においては、「僕」と悦子は「あらゆる<権威>が崩壊し、家父長的なく<権威>が統治する<家>を持たない<敗戦国民>の<息子>と<娘>」であり、このような<孤児>としての「僕」と悦子は「自由な恋愛を謳歌することも出来るが、「占領下では、それらの<孤児>となった彼らを纏め上げる別の<権威>が存在し」、「それがいうまでもなく、<アメリカ>なのである」(*6)と指摘されたのである。これを言い換えればつまり、小説における「僕」と悦子は日本の代表で、二人はアメリカの代表であるクレイゴー中佐の存在によって自由に恋愛できなくなったわけである。まとめてみれば、1980年代以降の「ガラスの靴」論は、小説の社会性にもっぱら目を向け、それによって、「僕」と悦子との葛藤はアメリカの占領によってもたらした「日本対アメリカ」の構図の中に置かれ、極言すれば、日米関係そのものを反映したと言っていいだろう。

「ガラスの靴」をめぐる両時期の言説は、「僕」と悦子との葛藤をいかに解釈するかによって分かれ、私的世界の物語か日米関係を背景に、強いては日米関係そのものを反映したかが分岐点である。内容から見れば、「僕」と悦子との葛藤はおそらく私的世界の物語には読みにくい。両者の交際は接收家屋という空間で行われ、クレイゴー中佐の休養時間にも決定的に左右されているからである。そして、予定より早く帰宅した中佐との「対決」によって、「僕」は敗北感と屈辱感を味わい、悦子のことを「どれほど強く切望しても、かなえられない望み」(311)(*7)だと悟り、「接收家屋の番号をうった小さな木の札が、名実ともに交戦中の敵の手に陥ちたものをあらわしていることに気付いた」(311)のである。「かなえられない望み」や「交戦中の敵の手に陥ちたもの」などの表現からわかるように、自分と悦子との感情が完全たる自由なものではなく、接收家屋の主人であるクレイゴー中佐に支配されることについて、「僕」としては十分認識しているのである。そして、米軍軍医として登場したク

レイゴー中佐は明らかにアメリカの象徴であり、「僕」と悦子との葛藤は外の世界と無縁な、いわば「ふしぎな実験室」(*8)で起こった出来事とはいいにくだろう。

「ガラスの靴」をめぐる言説は以上のような分岐点があるが、ほとんどの論者は「僕」の語りに沿って小説を解説し、分析を行った。たとえば初期段階では、いわゆる「心理的な時間のずれ」は「僕」の目に映された悦子の子供っぽさに由来したもので、第二段階では、「どれほど強く切望しても、かえられない望み」という「僕」の認識が強調されたからこそ、クレイゴー中佐の象徴性が浮上したわけである。勿論、「ガラスの靴」は第1人称で書かれた小説であり、語り手を兼ねた主人公の「僕」に焦点を当てて、小説を解説しても妥当であろう。しかし、「悦子なしではいられなくなった」

(304)「僕」に対し、当事者の悦子は両者の交際 to いかなる感情を抱いているのだろうか。そもそも、「恋愛」とは「男女が恋い慕うこと」であり、互いの感情が必須となるだろう。「ガラスの靴」においては、「僕」は確かに悦子に強い感情を抱いているが、悦子は「僕」に対し、いったいどんな気持ちだったのか触れていないようである。従って、私的世界の物語と読んだとしても、日米関係を考慮に入れて考察したとしても、もし「僕」と悦子との葛藤を「恋愛」として片付け、それを前提として論を進めれば、おそらく不適切な結論にたどり着くだろう。

本稿は以上の問題意識から出発し、「ガラスの靴」における悦子への考察を行うものである。悦子は「僕」にどんな感情を抱き、さらにこのような悦子は「ガラスの靴」においてはどんな役割を果たしたかについて考察したい。

1. 考察対象

悦子への考察は必要不可欠な作業である一方、現に極めて困難な作業と言えよう。なぜなら、一人称の「僕」が語り手であるがゆえに、悦子に関する描写は殆どすべてと言っていいほど「僕」を媒介にしてなされたものだからである。従って、悦子への

考察を行う前に、いかに考察するか、つまり考察対象と考察手段の選定が必要である。

「ガラスの靴」は「<僕>という一人称の語り手による回想的な語りで一貫している」(*9)が、冒頭は既に親しくなった「僕」と悦子との深夜電話のやりとりから始まったのである。この部分を考察すれば、二人のやりとりは直接話法で記されたことがわかり、これによって悦子への考察が可能ではないかと筆者は考えたのである。

周知のように、直接話法は間接話法と違い、その時に話していた内容をそのままの形で再現するため、話し手の解釈や思いが入っておらず、話し手の解釈や思いが話されることはあってもカギ括弧の中の文は、オリジナルのそのままの文が守られているのである。「ガラスの靴」においては、悦子に関する描写は殆どすべてと言っていいほど「僕」の目を通してなされたものであるが、直接話法で記された悦子の話を中心に分析すれば、悦子への考察が可能になるだろう。従って、筆者は「ガラスの靴」における悦子の話を抽出し、直接話法で記された部分を整理した上で、分析を行いたい。

2. 悦子の話

直接話法で記された悦子の話はおおむね三箇所集中している。時系列に沿って言えば、以下の通りである。1) 「ヒグラシ」をめぐる話し合い；2) 深夜電話のやりとり；3) 悦子の猟銃店訪問。以下それぞれ考察する。

1) 「ヒグラシ」をめぐる話し合い

「ヒグラシ」をめぐる話し合いは、クレイゴー中佐夫婦がアンガウル島へ出掛けた一週間後、「僕」が再びクレイゴー中佐の家へ行った時に行われたものである。夏休みの回想からよみがえった憂鬱さと焦燥が「二人の気持ちにふれあい」(296)、「僕」は「きょうもまた怠けて遊んでしまい、手のつけてない宿題帳の山をながめながら、ヒグラシの鳴くのをきくのはやりきれなかった」(297)と言ったら、悦子は不意に「ヒグラシ」について質問をし、別の話題に展開させた。

- (1) 「あなた、ヒグラシの鳥って、見たことある？」 (297)
- (2) 「そうオ、あたし、これくらいの鳥かと思った。」 (297)
- (3) 「あなたのおっしゃることって、嘘ばかり。だってあたし見たんですもの……軽井沢で。」 (297)

直接話法で記された悦子の話には、人称代名詞の使用に注目したい。「人称論は言語論であるとしても、その言語論の事柄も根本的には、倫理的なテーマです。」(*10)と平子義雄氏が指摘したように、人称は単なる文法の問題ではなく、人格、人間関係を考察する重要なベクトルと言えよう。そこから考えれば、確かに自称として使われた「あたし」は、「わたし」から転じたもので、「わたし」よりややくだけた言い方として、主に女性に用いられるものであるが、自分のことを指すだけでなく、使用する人の意識、また聞き手への気持ちが表出できる表現と言えよう。したがって、上記各文における「あたし」から、「僕」に対する悦子の気持ちが読み取れるだろう。つまり、二度目の対面にもかかわらず、「あたし」を使うことによって、女性としての自分をアピールし、「僕」に好感を持たせようと努めたと推測できる。実際には、この「ヒグラシ」をめぐる話し合いによって、「僕」は悦子の耳たぶに接吻し、悦子のことを「魅力のとばしい方」(296)から一人の女と感じはじめたのである。

2) 深夜電話のやりとり

前述のように、「ガラスの靴」は男女二人の深夜電話のやりとりから始まった小説である。この深夜電話に関しては、黒田翔大氏が占領期の電話使用状況を中心に詳しく論じたことがあるが(*11)、筆者は特に悦子の発話内容に注目したい。

(4) 「ああ、あたし、熊に会いたいな。あなた、熊がお魚かついで歩いてるの、みたことある？」 (293)

(5) 「つまんなそうに返辞するのね。熊っていいなあ。熊は人間とお話できるんですって、ほんとかしら。」 (293～294)

(6) 「だって、あなたの田舎は北海道だっておっしゃったくせに。そんなこと、知らないの？」 (294)

上記引用文は小説の冒頭部に出た悦子の話である。内容から見れば、悦子はすっかり自分の「童話世界」に没頭し、親しくなった「僕」に対しても異性間の感情を伝えていないと言えよう。勿論、これは悦子からの特別メッセージかもしれない。つまり、このような童話的なメッセージを伝えることによって、「僕」への思いを表出するわけである。しかし、悦子の話は、「実体のないただ言葉の形骸」 (304) のように思われ、たとえ悦子に特別な思いがあってもそれをきちんと「僕」に伝えることができず、「僕」としても全く受け取れなかったと言えよう。一方、「僕」の語りからわかるように、接收家屋における二人の交際はむしろ「悦子のオトギ芝居」 (301) のようなもので、この「オトギ芝居」の実体は上記深夜電話のやりとりからある程度窺われるだろう。したがって、この深夜電話の内容からみれば、おそらく悦子は「僕」に対し特別な思いを抱いていないだろう。

初期段階においては、女性としての自分をアピールした悦子が、なぜ実際の交際段階に入ると、異性間の感情を伝えず、ひたすら「童話世界」を作り、「僕」をそのような「童話世界」に誘致したのだろうか。「ガラスの靴」においては、悦子の心理活動が全く書かれていないため、以上の問題には答え難いが、おそらく、悦子はクレイジー中佐夫婦のいない三ヶ月、その間の遊び相手を欲しがっていたのではないだろうか。したがって、彼女は初期段階において積極的に「僕」を誘い、いざそれが成功したら、ただ三ヶ月の「休み」をいかに楽しく過ごせるかに夢中になっているのである。

3) 悦子の猟銃店訪問

悦子の猟銃店訪問は「僕」の「敗北」後、「悦子のことを忘れて一日を送った」 (311) 後の夜だった。

(7) 「三年ぐらい会わなかったみたいに。」 (312)

(8) 「驚いた？」 (中略) 「あさって帰ってくるんですって。二日間のびたのよ、お休みが。」 (312)

(9) 「けさ早く言っちゃったの。すぐあたなに電話したんだけど、どうしても通じなかったわ。」 (313)

猟銃店に来た悦子の話では、特に (7) に注目したい。この「三年ぐらい会わなかったみたいに」には、深く恋に陥った男女の思いが含まれていると言えよう。したがって、猟銃店に来たこと、さらに (7) のように言ったことから見れば、悦子はおそらく「僕」に恋心を抱いているのであろう。しかし、「この女とはもう離れられっこない」 (314) と信じ込んだ「僕」が「悦子のスカートのまわりをさぐっ」 (314) たら、自分の手が「突然ふりはらわれ」 (314)、「いけないわ、そんなこと」と言われた。これはあまりにも唐突で、「僕」は最初の驚きから咄嗟に羞恥を感じ、「「それなら何故来たんだ」とどなった」 (314)。

「僕」の反応はおそらく男性としての自然な反応だろう。何故なら、「愛している」「彼女」が自ら自分のところに来るだけでなく、「三年ぐらい会わなかったみたいに」とも言った以上、自分への気持ちが十分伝わってきたと信じ込んだのも無理はないだろう。しかし、このような「彼女」に性的な要求が拒否されれば、誰もが恥と怒りを感じ、さらに自分の「いやらしさ」を洗い流すために、相手を責めかけるだろう。一方、女性としての悦子はその言動には理解し難い部分がある。つまり、猟銃店に来たにもかかわらず、なぜ「いけないわ、そんなこと」と言って、「僕」の性的要求を拒否したのだろうか。

ここで、もう一度悦子の話を考察したい。確かに悦子は自ら猟銃店を訪ね、「三年ぐらい会わなかったみたいに」と言ったが、しかしこれは果たして「僕」と「完全になくなる」 (314) ため行なった言動だろうか。上記引用の (8) と (9) からわか

るように、予定より早く帰って来たクレイゴー中佐夫婦は再び旅行に出ており、それをいち早く「僕」に伝えたが、電話がなかなか通じないため悦子は猟銃店に来たわけである。つまり、悦子の猟銃店訪問は「休みの延長」を「僕」に知らせるためであり、その究極の目的はおそらく「休み」の時と同様、「僕」と残りの二日間を過ごしたかったのだろう。そう考えると、「三年ぐらい会わなかったみたい」とは、悦子の恋心を伝える言葉というよりむしろ遊び相手を確保するための手段と断言していいだろう。

以上は時系列に沿って、直接話法で記された悦子の話を整理し、考察を行なった。まとめて見れば以下のような結論にたどり着ける。交際の始まりにおいて、悦子は女性としての自分をアピールし、「僕」に好感を持たせようと努めたが、実際の交際段階に入ると、彼女は自分の「童話世界」を構築し、「僕」を遊びの相手としてその世界に誘致した。そして「僕」の「敗北」後、悦子は「僕」のアルバイト先の猟銃店に来たが、それは「休みの延長」を伝えるだけで、決して「僕」と「完全に一つになる」ためではなかった。要するに「ガラスの靴」における悦子は「僕」のことを遊びの相手として扱っており、恋愛などについては毛頭考えていなかったと言えよう。

3. 悦子の役割

「ガラスの靴」は語り手を兼ねた「僕」の回想によって書かれた小説であるが、直接話法で記された悦子の話の分析を通して、「僕」に対する悦子の気持ちがわかり、それによって、悦子の役割も分析できると思われる。

悦子の役割についてまず考えられるのは、「ガラスの靴」における男女交際の性質についての再検討である。前述のように、初期「ガラスの靴」論は「僕」と悦子との葛藤を私的世界の物語として解釈し、それを「ふしぎな実験室」で起きた「恋愛」と位置付けた。そして、「恋愛」の失敗は「心理的な時間のずれ」(*12)が原因で、こ

の「心理的な時間のずれ」とは大人の「僕」と子供っぽさのある悦子との間に隔てられた恋に関する認識の差異だと言われている。しかし、いわゆる「子供っぽさ」はむしろ悦子の「術」のようなもので、彼女の「童話世界」に「僕」をうまく誘致する道具と言っていいだろう。そして、第二段階における「ガラスの靴」論として、「戦後の空虚さと喪失感を抱え込んだままに、「他者」と関わり出会うことができずにいた、自意識の損なわれた「僕」の物語なのである」(*13)というような解説があるが、これは「僕」に焦点を当てた結論で、戦争の被害によって「「僕」と悦子に恋愛の可能性をもたらした」と言い換えることができる。しかし、「僕」と「「他者」との言葉のコミュニケーションを取ることができ」(*14)ない原因は戦争の被害ではなく、悦子の「実体のない」言葉、いわば「言葉の形骸」によってもたらされた結果ではないだろうか。つまり、「僕」は悦子を愛せないというわけではなく、愛そうとするが、愛したくない、あるいは愛の意欲を見せない悦子と付き合っているだけに、愛せなくなったわけである。したがって、「ガラスの靴」は外の世界と無縁な私的世界の物語として読まれても、日米関係を背景に読まれても、「僕」と悦子との葛藤はとも「恋愛」とは言いがたく、二人の交際の性質は悦子の役割によって明確にされており、いわゆる「恋愛」とは「僕」の一方的な想像にすぎないのではないだろうか。

悦子の役割について二番目に考えられるのは、悦子の象徴性に由来したものである。米軍の接収家で働くメイドとしての悦子は、おそらく一般の日本人女性と違っている。「うっかり僕は、彼女がずっと昔からこの家でそだてられた娘であるような錯覚を起こした。」(300) これは接収家屋に行き慣れ、「ずうずうしくなった」(300)「僕」の目に映った悦子のことである。「ずっと昔からこの家でそだてられた娘」という印象は「僕」の「錯覚」に過ぎないかもしれないが、悦子の身の上にはアメリカ文化の影響が若干あるのであろう。「絨毯の上にそのまま横坐り」、「片ヒジを皮のstuhlにのせて、うつむき加減に本を読」(300)む悦子の姿はどうも日本伝統

の読書姿とは違い、クレイゴー中佐夫人から教わったジェローパイを「僕」と食べながら接吻するのもハリウッド映画の一シーンを連想させられる。したがって、もし悦子のことを「僕」と関連付けず(*15)、「ガラスの靴」における独立要素として見てみたら、おそらく彼女は戦後アメリカ文化の影響を多大に受けた女性の一部と言えよう。アメリカ文化に接触するチャンスが多い彼女たちは、否応なくその影響を受けており、そして、メイドなどの身分であるため、クレイゴー中佐のようなアメリカの代表に反抗できず、言われるままにすることが多いに違いない。しかし、彼女たちは自分なりの考えがあり、悦子のように、「僕」を接収家屋に招待するのもその一例であろう。もちろん、「僕」を遊びの相手として扱い、恋愛などについて思ってもいないことはアメリカ文化の影響かどうかは不明であるが、小説における悦子を通して、戦後の一部の女性像が窺えるのは確かなことであろう。

4. 終わりに

本稿は安岡章太郎の短編小説「ガラスの靴」における悦子を中心について考察を行った。直接話法で記された悦子の話の分析を通して、「僕」に対する悦子の気持ちが変わり、それによって彼女の役割も浮上した。クレイゴー中佐夫婦の留守の間、悦子は「僕」を招待したが、それは遊びの相手として扱っており、恋愛など毛頭思っていないようである。このような悦子の登場によって、今まで認めてきた男女交際の性質について再検討する必要がある、物語全体の解説にも新たな視点が必要になるだろう。つまり、「ガラスの靴」における「僕」と悦子との葛藤は決して「恋愛」ではなく、むしろ「僕」の一方的想像と言った方が適当だろう。そして、日本対アメリカの構図で読まれた「ガラスの靴」には、このような悦子が存在し、それによって再読する必要があると思われる。また、悦子の考察を通じ、戦後女性像の一部が窺え、アメリカ文化はこれらの女性に多大な影響を与えたのは確かなことであろう。

「社会内部の階級差を際立たせる一方、占領された社会の従属性を体現する」(*16)
メイドは、単なる雇われた、家事などの用をする女性のことでなく、「彼ら」の世界と「我々」の世界との間を往来する者で、「攪乱的人物」とも言える。こうしたメイドの性質を念頭に置けば、「ガラスの靴」における悦子はより複雑になり、興味深い存在になるだろう。今後、安岡章太郎の他の小説、ひいては戦後占領期の文学も含め、研究を深めたい。

***本研究は「日本戦後『第三新人』研究」（2014JJ015）の研究成果である。**

註

- 1 吉行淳之介 (1997) 「『ガラスの靴』『愛玩』解説」安岡章太郎他『群像日本の作家 28 安岡章太郎』小学館 p139
- 2 勝又浩 (1997) 「待つことの逆説——安岡章太郎」安岡章太郎他『群像日本の作家 28 安岡章太郎』小学館 p120
- 3 同 1
- 4 清岡卓行 (1977) 「芸術的均衡の美しさ——『ガラスの靴』について」『国文学 解釈と教材の研究』8 p27
- 5 鈴木正和 (2005) 「『驟雨』と『ガラスの靴』の痛みの行方——愛の不可能性を描いた文学——」『近代文学研究』3 p42
- 6 小野絵里華 (2010) 「安岡章太郎の短編小説『ガラスの靴』考——透明な物語に埋め込まれた屈辱・権威・＜公＞のモチーフについて——」『言語情報科学』8 p246
- 7 本稿は『第三の新人名作選』（講談社、2011）に収録された「ガラスの靴」をテキストとし、以下ページ数だけ示す。
- 8 同 4 p28
- 9 杉本和弘 (1997) 「『ガラスの靴』の時空——「シンデレラ」の影——」『昭和文学研究』2 p81
- 10 平子義雄 (2012) 『あなたがいてわたしがわたしになる』郁文堂 p ii～iii
- 11 黒田翔太 (2015) 「『ガラスの靴』における破局：占領期の電話をめぐる」『日本文藝學』51 p117-133
- 12 同 4
- 13 同 5
- 14 同 5
- 15 小野絵里華氏は悦子のことを「僕」と同様視しており、両者を「＜家＞を持たない＜敗戦国民＞の＜息子＞と＜娘＞」と見ている。同注 6。
- 16 マイク・モラスキー (2006) 『占領の記憶記憶の占領：戦後沖縄 日本とアメリカ』（鈴木直子訳）青土社 p74